

競技かるたの「序歌」って何？

難波津に 咲くやこの花 冬ごもり いまを春べと 咲くやこの花
主仁

訳：難波津に梅の花が咲いている。冬ごもりをして、今こそ春が来た
たといって梅の花が咲いている。

この和歌は、百済から日本に渡来し、儒教や漢字を伝えたという王仁が仁徳天皇の即位を祝って詠んだ歌といわれています。『古今和歌集』の仮名序で、紀貫之が「歌の父母のようにてぞ手習ふ人の初めにもしける」と紹介しているように、習字でまず習うものがこの歌でした。平安時代の『源氏物語』にも、光源氏がまだ幼い紫の上に結婚を申し込んだ際、祖母が「まだ難波津の歌さえもちゃんと書けない子どもですから」と答える場面があります。

さて、競技かるたでは、試合の始めに、百人一首には入っていない歌を読み、試合開始の合図とします。これを「序歌」と言います。全日本かるた協会の依頼により、文学博士で歌人でもある佐佐木信綱氏が、この「難波津に」の歌を序歌として選定しました。また、地方によっては、その土地にゆかりのある歌が序歌として読まれることもあり、おもしろいですよ。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ